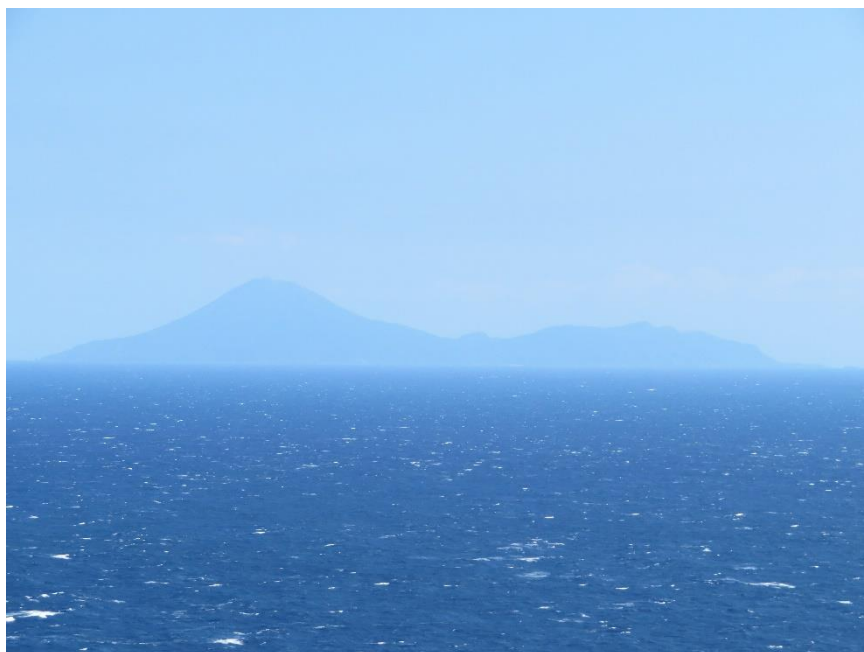


2222 離島覚書（鹿児島県・中之島）



平島から中之島を望む

令和4年12月13日

温泉

「フェリーとしま2」は定刻よりも少し遅れて、6時13分に中之島に着いた。鹿児島港から南に224 km離れており、7時間強を要した。

中之島は関東からはだいぶ西になるので、日の出は1時間ほど遅い。フェリーは降りたものの、辺りは暗闇でしかも初めての土地ときている。日の出まで待つことにしたが、車の中で寝ているのも能がない。

港の近くに温泉があり、終日入れることは事前の調査で把握していた。兎に角、温泉に入って時間をつぶそう。とのことで温泉のある場所を探してレンタカーで海岸沿いをゆっくりと走ったがみあたらない。たまたま暗闇の中に女性がいるのを発見し、温泉の場所が聞けて辿り着けた。

中之島には温泉が3つある。2つは集落の人たちが管理する温泉で、西区温泉と東区温泉と呼ばれている。両温泉ともに海岸線沿いにあり、道路の下に置かれている。もう一つは両地区の温泉の間にある中之島温泉で、役場の出張所のすぐそばにある介護予防拠点施設「くつろぎの郷」内にある。こちらは有料で午後からのみ入浴可能のようだ。

西区温泉に入った。乳白色で硫化水素臭が漂い、如何にもひなびた温泉の雰囲気である。乳白色のミョウバン、硫黄、塩分を含んだいわゆる硫黄泉である。泉温は73.1℃と高く、湧出量は9ℓ/分、pHは6.0の弱酸性である。料金に定めはないが、維持管理する上で費用がかかるため、協力金を求めている。1,000円以上の協力金を支払った人は紙が用意されていてそこに氏名を書いてお金を一緒に箱に投入する。協力金を提供した人の名前がずらりと板に書かれ、壁に掲げられていた。

日の出前なのでもちろん誰も入ってこなかった。

この中之島の温泉のことは、笹森儀助の「拾島状況録」（明治28年に約3ヶ月をかけて現在の三島村、十島村を調査）にも出てくるから相当古くからあったものだ。その一節を引用しておこう。

「温泉ハ雨泊海岸沸々地下ヨリ噴出ス 干潮ニアラザレバ浴スル能ハズ 然ルニ村下道路ノ傍ニ出ズル者常ニ浴スルヲ得ヘシ暖ニ過クルヲ以テ土人之ヲ引キテ下ニ浴場ヲ設ク」

風呂から出るころには陽が登り始めた。近くにコミュニティセンターがあり、その中に十島村役場の出張所が置かれている。中に入ると、仕事で来たと思われる若い男性がパソコンに向かっていた。幸い、事務所に朝早くから事務担当と思われる女性がおおり、彼女から島の地図と島内の道路事情を聞く。



道路下の湧く西区温泉の建屋（左）、西区温泉の浴室（右）

西区と東区

中之島の面積は34.42 km²で、周囲は28.0 kmである。トカラ列島の中では最も大きな島で、十島村の中心だったことから1956（昭和31）年まで十島村役場が置かれていた。しかし他の島の人々にとって役場に来るのが不便であったことから、その後現在の鹿児島市に移っている。他の市に役場を置く例は三島村（鹿児島市）や竹富町（石垣市）が知られる。

島の北西側に御岳おたけがそびえる。標高は979mで、トカラ列島の最高峰である。別名「トカラ富士」とも称され、そのなだらかな稜線が美しい。南東側には先割岳（524m）などの山があり、2つの火山が接合してできた島である。2つの火山を間は盆地になっており、広い平地が連なる。

集落は港に近い西区と東区、2つの山の盆地に形成された内陸部の日ノ出区の3つである。日ノ出地区は後述するように戦後、開拓民が入植して拓いた土地である。3つの区にそれぞれ区長がいる。

西区と東区の境は十島村役場中之島出張所の脇を流れる宮川である。この川を境に北西側が西区、南東側が東区になる。

西区の集落は海岸から少し登った斜面に階段状に形成されている。古くは楠木集落と里集落と呼ばれてきた。両集落の中間に西区住民生活センターと呼ぶ集会所が置かれている。

ちなみに楠木は城（グスク）が「グスキ」となり、長い時代の変遷を経て「くすき」と音のみが残り、明治以降の地籍確定のころに「くすき」の音韻をそのまま当てはめて「楠木」としたものの説があり、中世には山城が置かれていたらしい。

東区の集落は西区とは対照的に海岸沿いに平行に形成されている。こちらには鹿児島中央警察署中之島駐在所、診療所、郵便局、村立小中学校などがある。東区はもともと船倉集落と呼ばれていた。小中学校の前には東区住民生活センターが置かれている。なお上述したように両地区ではそれぞれ温泉をもっており、24 時間いつでも自由に入れるから、各家に風呂を設ける必要はないのだろう（未確認）。

2015 年国勢調査時の世帯数は 99 戸、人口は 171 人で 7 島の中でも最も多い。住民基本台帳上（2022 年 11 月現在）の世帯数は 87 戸、人口は 142 人である。このうち I ターン者の家族を含めた人口は 30 人を下らないという。



山の傾斜地に形成されている西区の集落（左）、海岸道路沿いに形成されている東区の集落（右）

中之島小中学校

海岸沿いの道を南東方向に少し進み、集落が途切れた先に村立中之島小中学校が置かれていた。小中学校の道路を挟んだ対面が広場になっていて、そこに教職員が通勤用の車を停めている。ちょうど出勤してきた先生がいたので、学校の現状を聞く。

小中学校の児童生徒は全部で 16 人、小学生が 9 人、中学生が 7 人という内訳である。この中には山海留学の子供が 2 人含まれているが、十島村の 7 島の中では山海留学生は少ない。教職員は 8 名である。先生 1 人に児童生徒 2 人ということになる。

子供たちが書いた絵が校門を飾り、その背後に校舎が建つ。ただ、校舎は改装中だった。校舎の背後は比較的広い校庭が確保されており、体育館や教員宿舎が並ぶ。敷地内には子育て支援施設「ほしのご園」（通常の保育園に相当）もあった。

後述するように東区温泉と帰りのフェリーでは、IT 関係の技術者と知り合いになった。彼は学校から招聘されて「情報モラル」をテーマにした学習会の講師として招聘されていた。インターネットで世界が結びつく中で、情報を受け取る側と発信する側が気を付けなければならないことを話したそうだ。ドローン飛行も実施して、その仕組みを説明し、子供たちからは大いに喜ばれたとのことであった。

外部から講師を呼んで最新の情報の講義を受けることができ、しかも教育は家庭教師並みであり、今の離島の教育環境は恵まれている。

小中学校を過ぎると標高は低くなり、海に出た。海上には噴煙をたなびかせる諏訪之瀬島、平島、臥蛇島がじゃじま、小臥蛇島を眺望できる。臥蛇島と小臥蛇島は無人島であるが、臥蛇島の方は 1970（昭和 45）年まで人が住んでいた。

海岸は溶岩と思われる黒い大小様々な岩が転がり、海上には白波が立ち始めていた。道路の先に「なごらん荘」という民宿があり、その少し先で行き止まりになった。老人が朝の散歩をしている。行き止まりから少し戻り、右折して山中の道路を進む。



村立中之島小中学校の入口（左）、改装中の校舎とグラウンド（右）

バナナと柑橘

急傾斜の道路を登っていくと、道路脇にバナナ畑や柑橘類の果樹園がところどころにあり、小規模だが農業が営まれている。バナナは「三尺」という品種で収穫期はちょうど12月ごろまでらしい。柑橘類はタンカンや高貴みかん、あるいは最近栽培が盛んになってきたスイートスプリング（温州と八朔の交配種）などが作られている。この他にパッションフルーツ、島ラッキョウ、ニラなども栽培されているらしいが、確認はしていない。このうちの一部は鹿児島市内の十島村役場1階にある「トカラ結プラザ」で売られており、島から戻った翌日、スイートスプリングと島バナナのスムージーを購入した。

このように現在の島の農業は換金作物が中心で、自給用にはわずかな野菜類が作られているにすぎない。ただそれらの生産量や生産額は不明で、島を見て歩いた感じではたいした量、金額にはならないものと思われる。

海で隔絶した島は、かつては島内で自給するしかなかったから、島民は半農半漁の生活を営んでいた。明治時代の中之島の農業の様子を振り返っておこう。

笹森儀助は1895（明治28）年にトカラ列島を調査し、「拾島録」を著わしているが、その当時中之島で栽培されていた農産物を作付面積の順番に並べると次のようになる。甘藷が最も多く、これに粟、麦、大豆が続く。米も僅かに作られていたが、島民の主食は甘藷と粟であったものと推定される。

甘藷：29町歩（45,240貫目）、粟：13町8反8畝（97石16斗）、麦：2町7反（16石2斗）、大豆：2町2反4畝（16石2斗）、田芋：8反4畝（840貫目）、玄米：4反（2石4斗）、里芋：1反1畝（121貫目）、この他にミカン、山藍、菜種などがつくられていた。

このことから明治中期の島民の主食は甘藷、粟、麦で、米はめったに食べられない存在であったと推定される。農業生産の多くは焼畑でつくられていたようだ。リュウキュウチクの竹林を刈り取り、燃やしてそこに粟の種を蒔いた。「1年目は粟山、翌年は筍畑、3年目は元に戻り、10年すればまた粟山」といわれ、10年を一つのサイクルとして焼畑が繰り返されていたのである。



バナナ園（左）、柑橘類の畑（右）

開発総合センター

西区と東区の境界を流れる宮川は急勾配で溪流のような小河川だ。水量は豊富である。道路を挟んだ反対側に地主神社が置かれている。この敷地からは弥生時代中期から末期にかけての土器片や石器が見つかったらしい。

ヘアピンカーブの続く急坂を登る。途中、「与助岩」という大きな岩があった。案内板によると、16世紀の中頃、トカラ列島を荒らしまわっていた海賊、日向の与助をその時の郡司が美女を囷にして酒盛りを開き、与助が油断したところで殺害した。その後、与助の霊はこの大きな岩となり、体は灰となって飛び散り、人々の血を吸うブド（ブヨ）となった、と言われている。ただし後述する資料館の展示ではこの岩の下に死体を埋めたと書かれていた。

やがて台地上に出ると、道路は直線になった。直線の起点あたりに今晚宿泊することになっていた開発総合センターがぼつんと1軒建っていた。周りには何もない。背後は牧場で、その先に御岳がそびえていて、景観は申し分ない。各島には開発総合センターなるものが整備されているが、通常は集落の中心地にある。したがって宿泊予定の施設がこんなところにあるとは想像を超えていた。

中之島には、なごらん荘、大喜旅館、中之島荘と「海咲」という民宿があった。前3施設は何れも工事関係者で満室であったり、旅行客の宿泊を拒否したりで泊まることができなかった。「海咲」は以前連絡を取った時、歓迎するような様子だったが、今回宿泊を申し込むと11月末が借りている建物の返却期限になっていて、これから宝島に移るといふ。よって「海咲」にも泊まることができず、結局、宿を確保できなかった。ちなみにここは美味しいフランス料理が食べられると鹿児島大学の鳥居先生から聞いていた民宿であった。

泊るところがないので、役場の出張所に相談すると開発総合センターを紹介してくれた。そして管理人の町田さんに連絡をとり、泊まれることになった。彼によると、開発総合センターは港からだいぶ離れているので、車で来るように言われた（島にはタクシーもレンタカーもないため）。また食事はないから食べ物を用意してくるよにとのことだったので、レトルト食品などを買い込んできた。

ところがこの日は冬型の気圧配置が強まっており、「フェリーとから2」は奄美大島まで行かず、宝島でUターンすることになり、運航計画が変更されていた。帰りのフェリーは17

時すぎに中之島港を出発することになった。つまり開発総合センターに停まる必要がなくなった。フェリーの日程変更を知った管理人の町田さんから電話がかかってきたので泊まらない旨、連絡していた。

開発総合センターには誰もいなかった。鍵がかかっており、あまり活用している様子は見られない。裏手一带は、高尾牧場と呼ばれ、昭和 50 年度から村営肥育センターが置かれたが、わずか 10 年で幕を閉じている。現在はそのうちの一部が肉用牛やトカラ馬の牧場となっている。道路を挟んで斜め前方には小さな池があった。その東側にトカラ馬の放牧場が広がっている。



日の出区に向かう道路と地主神社の鳥居（左）、開発総合センターの建物（右）

トカラ馬牧場

開発総合センターの先の道路両側はトカラ馬の牧場になっている。道路左手の南側には雄が、右手の北側には子馬と雌馬が、それぞれ分けて飼われている。一緒に飼うと、雌を巡って雄同士が激しい喧嘩をして殺し合い始めるほど気性が激しいらしい。したがって発情期だけ、一緒の場所で飼うのだそうだ。

ここでトカラ馬についての解説をしておこう。

トカラ馬は蒙古系馬に由来するとされる日本の在来馬で、体高が 108～122 cm の小型の馬である。ポニー種に分類される。たてがみと前髪が長く密生している点に特徴がある。トカラ列島にもともと馬はいなかったが、1897 年ごろに喜界島から宝島に農耕用の使役目的で移入されたものだった。戦前まで宝島では 100 頭以上飼養されていたが、その後、車両や機械の普及で飼養頭数が激減する。

絶滅してしまえば日本固有の家畜の遺伝資源は失われてしまうことから、村が中心となって、宝島に残ったトカラ馬を中之島に移して繁殖が重ねられてきたのである。現在、牧場にいるトカラ馬はその子孫である。1952（昭和 27）年に「トカラ馬」と命名され、県の天然記念物に指定された。トカラ馬は宝島でも数頭見たが、中之島以外にも予備の繁殖集団として開聞山麓自然公園と鹿児島大学付属牧場でも飼育されており、近親相姦を防ぐ対策もとられているようだ。

現在は、十島村役場の教育委員会が管理し、実作業は大阪出身の若い夫婦が行っている。



トカラ馬（左）、トカラ馬の牧場（右）

十島村歴史民俗資料館

トカラ馬や牛の牧場に囲まれた一角に十島村歴史民俗資料館が置かれている。管理人が常駐しているわけではないので、電話をかけて開けてもらう必要がある。トカラ馬を眺めて写真などを撮っていると、ちょうど夫婦とおぼしき人物を乗せた軽自動車が資料館の敷地に入って行った。事情を話すと、この人物が管理人その人であった。すぐに鍵を開けてくれて資料館を見学する。入館料は300円だ。非常にタイミングがよかった。この夫婦こそ、上述したトカラ馬の世話をしているIターン者だったのである。

歴史民俗資料館は、失礼ながら村営にしてはきわめて充実している。そして展示方法も洗練されていた。

トカラの自然として、昆虫、植物、鳥、トカラハブが写真入りでパネル展示されている。続くトカラ馬のコーナーでは、トカラ馬と日本の在来馬の解説、さらにトカラ列島に生息する野生哺乳類のトカラヤギ、口之島野生牛、トカラ馬と日本ザーネン（乳用ヤギ）、黒毛和牛、サラブレッドの人工改良種の頭蓋骨が比較展示され、トカラ馬の骨格標本もあった。

また1933（昭和8）年に就航した「としま丸」から始まる歴代連絡船の模型が全て展示されている。

トカラ列島の歴史は、先史、中世の交流・交易、七島島史、東アジアとの交易、幕藩時代に区分されてそれぞれの時代を解説している。トカラ列島は、薩摩藩と琉球王府に両属していたが、1609年の薩摩藩の琉球出兵以降、薩摩藩の支配を受けるようになった。薩摩藩は船奉行がトカラ列島を管轄し、藩派遣の在番、郡司（浦役兼務、島政）、そして藩と島の両横目が置かれた。中之島の在番所は、中之島の他に諏訪之瀬島、悪石島を管轄した。

続く民俗に関しては、漁撈、農具、竹・焼畑、ボゼ（悪石島に伝わる奇祭で使われる仮面）、着物の儀礼、トカラの信仰、丸木舟、盆・正月、陶磁器などに分けて解説されていた。

漁撈部門では、①カツオ漁と鰹節加工（古い道具も展示）、②トビウオ漁と塩干品づくり、③サワラ漁、つまり中之島を代表する伝統的漁業が詳しく展示されていた。この地方のサワラ（オキサワラ）漁業は、木を削って作った餌木を竹の先につけてサワラを誘導し、サワラが餌木に付いたところを3つ又のウヅキやホコで突く、いわゆる突き漁業であった。この時代に使われていた餌木も展示されている。しかしながら今日、カツオの回遊は少なくなり、5～6月にかけて産卵回遊して来るトビウオもほとんど獲られていないし、サワラは昔と

異なりトローリングで獲られている。残念ながら島の主力の伝統漁業は大きく変質してしまっただ。

また漁撈や移動に使われた丸木舟が展示され、その製作工程（森林からの木の伐採から船ができるまで）が示されており、非常に興味深かった。

農業の展示は、①竹の伐採に使われたヤマキイと呼ぶ山刀（タイ、ラオス、ベトナム北部で使われているものと類似するという）、②ヘラと呼ぶ甘藷の植え付けや甘藷堀り、除草に使われた道具、③竹林の焼畑農業、④手箕や籠、箆などの竹製品、⑤ヘラやツメなどの道具里、などである。

トカラ列島の陶磁器のコーナーで目を引いたのは、12～13 世紀の中国竜泉窯の青磁や高麗青磁などが臥蛇島に多く残されていた点である。中世の時代に、今は無人島になっている臥蛇島が中国や朝鮮と盛んに交易していたという事実を物語るもので、当時のトカラ列島は外に開かれた世界であったことに驚かされる。

9時37分に歴史民俗資料館を後にして、近くにある中之島天文台を外から眺めた。周囲は草に覆われ、利用している人がいるのだろうかといぶかしく想う。



十島村歴史民俗資料館（左）、中之島天文台（右）

御池

高尾盆地の直線道路を東に向けて進み、最初の分岐を右折してすぐに左折するとかなり広い湿原らしきものが見えてきた。

道路脇に牛を引きながら歩く男性がおり、その後を奥さんとおぼしき女性が軽トラックを運転しながら続いていた。もしかしたら放牧地を離れた牛を連れ戻してきたのかもしれない。周辺には人家が数軒散在している。

その先に進むと御池が現れた。新生代第3期（絶対年代で約100万年前）の火山活動によって誕生した噴火口が池になったと看板に書いてあった。その後周囲から土砂が流入して今の形になった。

池の周囲は約2kmで、水深は4mである。池底が泥状のため、島民からは「底なし沼」と呼ばれているようだ。

池の周りはマテバシイ、タブなどの照葉樹林になっているが、一部に崖崩れを起こしている箇所もあり、道路も危なっかしい状態であった。水面には20羽以上のカモが泳いでいた。そのうちの2羽はマガモとはっきりわかった。ここは野鳥類の天国となっている。

池の周りをさらに進むと九州電力(株)の取水口があった。池の水は水力発電に使われており、その下流は通行止めになった。発電施設があるようだ。地図には脇ノ川発電所と記載されていた。水量が少ないから発電量は少ないだろうが、島にとって水力発電所はきわめて貴重な存在だったに違いない。

十島村で最初に発電設備が導入されたが中之島で 1952(昭和 27)年 9 月のことであった。当初は 1 日 8 時間のみの送電であったが、この水力発電所ができて以降は 24 時間となった。その後、発電施設は九州電力に移管され、さらに電力需要の増加に伴い、現在は西区のはずれにディーゼル発電所が整備されている。

行き止まりで U ターンし、島北部を一周しようと思って林道古里線に向かったが、林道の起点にさしかかると、「この先通行止・十島村」と書かれた看板が立っていた。進行を断念し、逆回りで周回を試みるべく中之島港に戻ることにした。

じつは島内放送で、「山口水産からお知らせします。9 時から 12 時までの間、ホタテを kg1,000 円で販売します」との島内放送があったから、その販売現場を見ておきたいと思ったのである。



カモが泳ぐ御池(左)、下流に設けられた九州電力の水力発電所の取水口

タルメ漁師

中之島港は地方港湾である。その北側に漁船専用の泊地(漁港区)が整備されている。漁港区に行くと、山口水産の加工場があった。しかし、放送していたホタテはすでに 10 時 30 分ごろには売り切れたとのことである。

漁港区には、加工場で働く職員、郵便局を定年後漁師になった人、タルメ(メダイ)釣りを専門にしている半田さん(64 歳)の 3 人が駄弁っていた。中に割って入り、島の漁業について聴取した。

漁港区域は 1980(昭和 55)年ごろに整備が完了したそうで、それ以前は現在の港湾の南側にある斜路に漁船を引き上げていた。同じような斜路がもう 1ヶ所にあった。その跡は現在も残っている。

中之島の漁業者は十島村漁協の組合員になっているが、島の組合員は正が 4 人、准が 20 人ほどである。准組合員の多くは購買事業を利用するために組合員になっているようで、実際に漁業を営む人は少ないとのことだ。購買事業では石油類、漁業資材と生活物資を扱っており、その販売額はほぼ同じ比率である。

島で営まれている漁業は、瀬もの一本釣りや曳釣り、イセエビの潜水漁業である。瀬もの一本釣りでは本キンメ（標準和名：ナンヨウキンメ）、ホタ（アオダイ）、チビキ（ハマダイ）、タルメ（メダイ）、ムツが主な漁獲物である。曳釣りではサワラ（カマスサワラ）、シビ（キハダマグロ）、カツオがメインだ。ホタは水深 150m よりも浅い水深帯、チビキは水深 300m 前後に生息するそうだ。

中之島では、イセエビは潜水により専用の鈎で獲っている。通常、イセエビは刺網で獲るのが普通だが、中之島の場合はサンゴが分布しているため、網がサンゴに引っ掛かって破れてしまうためだ。特に中之島のサンゴは固く網がかりすると容易に外せないという。このためイセエビ専用の鈎が使われている。中之島以南の島々ではどこも鈎で獲っているという。なお中之島は陸域が急峻なので海底地形も急峻で、イセエビが生息する面積は狭い。したがって資源はそれほど多くない。

現在、イセエビを出荷している職業漁師は 1 人だけ、その他の大多数の漁師は自家消費用に獲っている。急峻な海底地形のため、トコブシなどの貝類はもともと生息していないし、海藻類も極端に少ないから磯根漁業はイセエビに限られる。

半田さんは周年を通じてタルメを専門に釣る漁師で、鹿児島県下では唯一の存在である。すでに 30 年以上のキャリアがあり、市場関係者の間では彼の船名の「海士丸」は有名な存在らしい。

タルメ釣りは 1 本のテグスに 15 本ほどの枝針をつけ、餌はイカの切り身やサンマを使う。サンマは台湾船が獲ってきたもので、こちらは船が大きく船上ですぐに凍結処理をしているため鮮度がよいそうだ。タルメは 21℃ 以下の水温帯に生息し、季節によって水深 100～500m の範囲で鉛直移動する。

漁獲したタルメは、鹿児島市中央卸売市場の鹿児島県漁連と九州中央魚市(株)の両方の荷受けに年毎に交互に出荷している。出荷方法は直接自ら搬入するケースとフェリーの乗せるケースに分かれるようだ。タルメの価格は、700 円/kg 前後で推移していたが、直近では 1,690 円/kg と高くなっている。

タルメ釣りはもともと大分県の漁師が始めたという。大分の漁師は冬期にトカラ列島に来て、夏になると八丈島方面にでかけたようだ。タルメの産卵期は 2 月で、この時期にタルメは 1 ヶ所に集まるようになり漁場形成されるらしい。このため、以前は大分県から 30 隻ものタルメ釣りの漁船が中之島に来たそうで、その他にも宮崎県、熊本県、鹿児島県からやって来たから、漁港には二重、三重に漁船が係船されるほどだったという。

タルメは 1 年で 1 kg ほどに成長するので、5 kg サイズは 5 歳魚ということになる。しかし最近魚体が小さくなっており、資源が減少している兆候だという。まき網では 1～2 kg のタルメを獲っているし、東シナ海の大陸棚では中国の底曳網漁船が乱獲しているので、海の魚はタルメを含めて極端に減少しているらしい。30 年のキャリアを誇る半田さんは、この間、タルメの資源は 1/30 ほどに減っているという。ちなみに東京キンメ（キンメダイ）は水深が一気に深くなるところに生息しているが、近年はさっぱり獲れなくなった。

中之島の本職の漁師は半田さんを筆頭に、全部で 4～5 人ほどだ。定年後島に U ターンして漁師になった人は、現場でお会いした郵便局に勤めていた人を合わせて 4 人おり、この人

たちは主にホタやチビキの深海一本釣りを営む。水産資源が減少しているため若い人がUターンして漁師になるケースはないという。

昔盛んだった漁業はトビウオとカツオだった。産卵のために回遊してきたトビウオは干して出荷した。昔はトビウオとイセエビで飯が食えたという。一方、カツオは最近大幅に少なくなっている。カツオは黒潮の縁を移動するが、黒潮の大蛇行が始まってからというもの潮流が遅くなり、カツオが回遊して来なくなったためらしい（黒潮は通常島の西を通る）。カツオに限らず魚が少なくなり、半田さんは「こんな海はみたこともない」と嘆く。

ダツの共同操業も口之島と同様毎年営まれ、年中行事になっていた。水温が下がるとダツに脂が乗り、この時期のダツは最高だったと3人とも口を揃えて、昔食べたダツを懐かしがった。この漁業を復活させたいと思っているが、すでに当時の網はなく、また新調しようにも売ってもしないらしい。

中之島で曳き釣り（トローリング）を営む漁船は5隻だが、主要な漁獲物であるカツオは上述したように近年少なくなり、シビも小型になっているという。以前は15～20kgのシビが飛ぶのが見えたそうだ。



話を聞いた3人衆・左から定年退職漁師、半田さん、加工場職員（左）、中之島港の漁港区域（右）

山口水産加工場

漁港の一面に水産加工場が建つ。2011（平成 23）年に十島村が整備したもので、実際の運営は鹿児島市内の有力な水産会社である㈱山口水産が指定管理者となっている。現場にいた男性が㈱山口水産の現地職員として働いており、加工場内を案内してくれた。

この加工場は島内で水揚げされた魚介類を買い上げて、フィレーやロインに加工処理した後、急速凍結している。生産した冷凍品は㈱山口水産が販売する仕組みになっており、㈱山口水産と十島村漁協、十島村役場の3社が協定を締結している。

急速凍結はテクニカン社の「凍眠」というアルコールブライン凍結の冷凍機が使われている。凍結した魚介類は真空包装し、冷蔵庫に保管。一定程度以上の貯まった段階で、鹿児島市内に搬送する。一部は島内消費に対応するため販売しており、この日の放送はその一環であった。事業開始初期のころは半年で600万円ほどを仕入れていたが、最近では島での漁獲量が大幅に減少しているようで、処理量が少なくなっている。兎に角、海に魚がいなくなっているとのことだ。日本船以外の中国や台湾の漁船による国際的な乱獲やここ4～5年の黒潮の蛇行が水産資源の減少を引き起こしているというのが現場の漁師の声であった。

ちなみに中之島と同じ急速凍結の設備が、その後、宝島や平島にも入っており、流通のハンディキャップを乗り越えようと頑張っているのだが、肝腎の魚が減ってはいけません。



山口水産の加工場（左）、加工場に整備されている真空包装機（右）

御岳

港で話を聞いてから御岳の登山口まで行くことにした。登山道は崖崩れを起こして頂上まではいけないかもしれないと役場でいわれていたが、せめて登山口まで車で登ろうと考えたわけだ。

隣の諏訪之瀬島の御岳は現在でも盛んに噴煙をあげていて入山は禁止されているが、中之島の御岳は1914（大正3）年に山頂の噴気孔底から泥土が噴出して以来、1949年と1973年に多量の噴煙をあげたことがある程度で、火山活動は停止している。

中之島の御岳は十島村の島々のなかでは最も高いことはすでに述べたが、この山は「しま山百選」（日本離島センター）に選ばれている。山の側面からわずかに噴煙が上がるのが見られるが、基本的に登山口から頂上まで歩いて行ける。ガイドブックによると、コミュニティセンターから登山口まで車で約15分、そこから徒歩40分で頂上と書いてあった。

登山口まではヘアピンカーブの連続である。道路はほぼ舗装されていたが、道の両側にはリュウキュウチクやハチジョウススキが生い茂っている。ちょうど刈り取りをした後だったのであまり抵抗なく登れた。しかし道路幅は狭く、片側にU字溝があるので、草に隠れたU字溝にはまったら一大事である。初めての道を慎重に運転しながら登って行った。

登山口の手前500mほどのところまでくると、先方に刈り取った草や竹を除去しているショベルローダーが道を塞いだ。仮払い機か何かで刈り取った草や竹をショベルローダーで集め、道路脇に捨てる作業をしているところだった。車を道路脇に寄せて、道を譲ってくれたのだが、この先は刈られた草や竹が道を覆っているという。

この状態が登山口まで続いているとのことだった。折れた竹がタイヤに刺ってパンクしたら大変なことになる。島にはガソリンスタンドも車の修理業者もいないし、ましてやレッカー車などないだろう。しかも帰りの時間が決まっているし、鹿児島空港まで車を返さなければならない。冒険はできないと判断し、残念ながら引き返すことにした。12時45分のことだった。島を周回する林道の分岐に戻ったのは1時06分のこと、下山に21分を要し

た。かなり慎重に運転していたことになるが、登りも下りも対向車に遇わなかったのが幸이었다。初めての道で、狭い道路ですれ違うのは大変なことなのだ。



御岳に登る途中の草刈り作業の現場（左）、御岳の雄姿（右）

林道

御岳から降りて、林道古里線（民有林道）を時計回りで島の北半分を周回することにした。反時計回りで走ろうとして通行止めの標識が出ていたため、走行を断念していたので果たして途中で通行止めにならなければいいがと願いつつ走った。この林道を通る車は少ないと思われ、道路上にはリュウキュウチクやハチジョウススキが倒れ込む。また道路上に落ちた枯れ木が多く、走りづらい箇所が何カ所もあった。幸い、通行止めの箇所はなく無事、島の北側半分を周回できた。あの看板は何だったのだろうか。

中之島の森林の大きな特徴は、松がことごとく立ち枯れていることだ。立ち枯れた松の姿は異様な光景である。かなりの大木でしかも立ち枯れてから 10 年ほど経っている様子だ。

島の北東部にはオキナワシイ、タブノキ、ガジュマル、イスノキの大木からなる森林が分布し、また島の南東部、先割岳南部からジンニョム岳にも比較的大きな木からなる森林が残るが、これを除くとほとんどの山林はリュウキュウチクが優占する植生が広がる。これは人為的な家畜の放牧や過去の焼畑による影響と考えられている。



立ち枯れた松（左）、リュウキュウチクに覆われた山（右）

南東岸

島の北半分を周回後、島の南東端にあるヤルセ灯台に向かった。途中でタチバナ遺跡と書かれた看板が立っていた。標高 165m の緩斜面に位置する縄文時代晩期のものである。日の

出区と七ツ浜を結ぶ村道工事中に発見されたらしい。約 300 m²の範囲に竪穴式住居跡 30、土杭 14、炉跡 14 の他に、土器、石器などが発見されている。こんな離島にも縄文人が住んでいたわけであり、舟で来たことは間違いないが、何処からどのように来たのだろうか。

坂を下っていくと、見晴らしのよい場所に出た。眼下に七ツ山海岸を見ることができる。その沖に臥蛇島が浮んでいた。条件がよければ遙か彼方に屋久島も見えるらしい。遠浅の海岸には幾重にも白波が立つ。ここはおそらく島で唯一の浜だろう。かつてこの辺りは入植地で人が住んでいたが、今は無人だ。海岸から一本の突堤が出ていてサンゴ礁を掘削した跡もある。以前は船が出入りしていたようだ。

七ツ山海岸の眺望を過ぎてヤルセ灯台に向かうと、崖崩れの跡を補修した箇所がいくつもあったが、やがて土砂崩れの現場に行く手を阻まれた。どういうわけか広島ナンバーの小型トラックが停まっており、この先の状況を調べているようだ。灯台まで行けなかった。

Uターンして一時避難場所（火山時）の標識が立つ角を左折し、キン岳の方面に向かう。この避難所にはコンテナ製の備蓄倉庫と簡易トイレが置かれていた。キン岳には登らず、島の南部を小周回し、日の出地区の盆地をめざした。



中之島東岸の七ツ山海岸、島影は臥蛇島（左）、崖崩れで通行止めになっているヤルセ灯台への道（左）

トカラヤギ

島を走っていると、野生のヤギにしばしば出くわした。また道路端にはヤギの糞も多く見かける。「トカラヤギ」といい、トカラ列島の各島に生息している。屋久島などで見られる野生のシカはしばしば立ち止まるのでシャッターチャンスがあるが、トカラヤギはけっこう臆病で、出くわすとすぐに林の中に逃げ込むので撮影が難しい。

トカラヤギは家畜化されているケースも多いが、諏訪之瀬島、平島では野生種にでくわした。中でも中之島には多いようだ。白と黒の斑の毛を有する個体がメインだが、黒が混ざらないものもいる。小型の肉用種で、平島なのでは行事の度に捕らえて食べられたので、資源が減っている。



草むらにいたトカラヤギ

日の出区

中之島港の周辺に形成されている東区と西区の集落の他に、御岳と先割岳の間の盆地に日の出区と呼ぶ集落がある。つまり中之島の集落は海側と内陸部に分かれている。

盆地の中央を走る直線道路の南側に碁盤の目状に区画された土地があるが、その一角に村営住宅と個人の住宅が散在している。上述した「民宿海咲」もこの集落にあった。さらに御池に向かう途中にも数軒の人家がある。

歴史的には海沿いの集落が古くからあるもので、日の出区はアメリカ軍政府下にあった戦後に開拓されたものである。戦後、奄美大島は人口が急増し、土地の利用や開拓の余地がなく極端な食料不足に陥っていたため、この打開策としてトカラ列島への入植が進められたのであった。

日の出地区の他に、島の南東端のヤルセ地区やセツ山地区も入植地になった。こちらは朝日地区と呼ばれた。戦後新たに2つの区が誕生したことになる。しかし日本は高度成長期に入ると貨幣経済化がますます進み自給自足経済は崩壊、島の農業は換金作物の導入により現金を稼ぐことになるが、島の不利な条件下ではままならず、1971（昭和46）年から離農が始まり、翌年は14戸が離農し、朝日区は消滅した。離農にあたって村は「離農助成対策事業」を導入している。

日の出地区は西区の人々の分家に伴う新たな耕作地として、また奄美大島を中心とした移住者によって開墾が進められてきたことから、奄美大島の出身者の子孫が残っているが、最近になってIターンしてきた人たちが多く住んでいるようだ。家の屋根はトカラ列島によくみられるアスファルトルーフィングが多い。



日の出区の盆地（左）、日の出地区に整備されている村営住宅（右）

共同牧場

中之島の産業は、黒毛和牛の繁殖と上述した漁業が中心である。村の資料によると、2020年の雌牛飼養頭数は80頭、子牛の出荷頭数は38頭で、7島の中では小宝島、平島に次いで少ない。出荷額は約2,000万円ほどだろう。

山麓の平地は牧場になっていて黒毛和牛が放牧されている。その一番東側に2つの牛舎が建っていた。私と同世代と思われる男性（戦後奄美大島から移住した開拓民の子孫）がいたので話しかけると、1つが分娩牛舎、もう1つが育成牛舎とのことである。分娩牛舎は出産まぢかの牛を放牧場からここに移動させて、出産させ、生まれた子牛は隣の育成牛舎で育

てることになる。島内には1～2頭を飼養する牛舎がわずかにみられたが、ここが生産の拠点といえる。畜産業者は中之島畜産組合を組織しており、現在の組合員は9人である。共同牧場には40頭ほど牛が放牧されているという。

放牧地はほとんどが竹林だった場所で、牛は竹を主たる餌としている。これはトカラ列島に共通する。ただし牛舎の近くの階段状の農地は牧草地になっており、ここでは干し草を生産している。余剰の干し草は小宝島にも送っているらしい。放牧地の少ない小宝島では感謝しているという。

牧場も牛舎も共有なのは、中之島の伝統的な土地制度が大きく影響していると思われる。島の土地は「神地」と「所地」に大別されていた。「神地」は原生林の未利用の土地、「所地」は共有地のことである。それ以外に「集落有地」「小集落有地」、そして「家有地」と呼ぶ私有地があった。つまり島の大部分は共有地だったのである。島という閉ざされた社会の中で人々が等しく生きていくための知恵だったにちがいない。なお本土復帰後、十島村にも農地法が適用され、農地の所有権の移転が始まったが、先祖代々続いてきた共有の思想は今なお続いているとみられる。



共同牧場の牛（左）、共同の分娩牛舎（右）

役場の出張所に戻ると、玄関前には歯科巡回診療の車が停まっていた。朝から島民の歯科診療を行われていた。

鹿児島港へ戻るフェリーは17時30分ごろ出発するという。まだ1時間半ほど時間があつた。そこでもう1つの温泉である東区温泉にも入った。泉質は西区温泉と変わらない。

すでに先客がいた。彼は中之島小中学校に講演にきたIT技術者だった。校長先生に島を案内してもらったが、歴史民俗資料館や御岳にも行っていなかった。彼とはフェリーの食堂でも一緒になり、少し話したが島が好きなので、また中之島に来たいと話していた。

予定通り17時30分ごろにフェリーがやって来た。鹿児島港に着いたのは翌日の1時37分だった。予約していた天文館にあるホテル南洲に直行する。ホテルは親切で午前様にもかかわらず、親切に対応してくれた。

【文献】

十島村誌編集委員会編（1995）：十島村誌。十島村。pp.1758.

十島村追録版編集委員会（2019）：十島村誌追録版。pp.969.